中川学長にインタビュー

社会的責任から導入

徹底したクラス討論を期待

学内の整備は相当かかる

止むを得ない処置だ(中川富弥学長)

——機動隊の導入の過程については。

八日の夕刻に機動隊の出動を要請した。これを決定した機関は学部長会議と法人理事会である。双方とも、止むを得ないというムードであった。

——この機動隊導入によって「自主解決路線」が崩壊したという見方が強いが。

最初のうちは団交を積み重ねてきたが、学生側はただ「ナンセンス、ナンセンス」というだけで、話し合いは向の進展もなかった。聴く耳を持たなければ、話し合いはできない。もっといけないことは両者の間にだんだんと憎悪にも似た感情が深まってきたことだ。

そのうち他大学の全共闘の学生が本学に移ってきて、内ゲバの危険性が生まれてきたし、さらに芝工大の内ゲバ事件のような悲劇が、本学で起こったらこれはもうとりかえしがつかない。先月の二十四日の全学教職員集会も流れた。その後の法学部・商学部の各教授会も学生が「粉砕」を叫んで中止させられた。今月四日の全学集会もゲバルトの危険があったので、屋外を選んで八幡山グランドにしたが、これも全共闘学生の妨害によって、流会となってしまった。その前の九月三十日、日大の騒動では本学の校内から火炎ビンが投げられて、非常に危険な状態で火災の心配もあった。神田の商店街・住民からは、その日から連日、わたくしのところへ苦情の電話がかかりっきりだった。その翌日、諸先生方に学内を見てもらったが、余りにもひどい荒廃ぶりだったということで憂慮していたわけである。そしてまた、十月十日には混乱が予想されたので、その前に機動隊の導入を決意したわけである。これまで何も学生におびえていたわけではない。学生を恐れたら、団交も全学集会もできるはずがない。また、全く話し合い方式を否定し、捨てたわけではない。

——機動隊導入、ロック・アウトの直接の理由は。

①に社会的責任（特に地域治安）②に学園内のひどい荒廃③に在学生の単位のリミット④に入試と卒業の問題——からだ。

——授業再開のメドについては。

何分にもまだひどい状態なのではっきりしたことはいえない。教室の机・イスがずい分減ってしまったし、各学部事務室や法人諸課の整備だけでも相当の日数がかかるものと思われる。今後対策本部会や教務委員会などで早急に検討したい。

——今後、どこを学生の交渉相手として話合っていくか。

交渉の必要があれば、やはり学生会・学苑会中執というになるだろう。全共闘に解散を命ずるというようなことはしない。両中執は全学生が加入しているから、尊重しないわけにはいかない。また、学生の処分は今のところ話し合われていないし、話題にも出ていない。

——中大では授業開始後も学生会館が閉鎖されているが、本学ではどうか。

学生会館の設置目的を学生が達行できるようになれば、開館したい。しかし、授業再開の時期と必ずしも一致しないかもしれない。遅くなることもあるし、早くなることも考えられる。また、学生会館で混乱が予想された時、ロックアウトするようなこともあるかも知れないが、今のところはまだ考えていない。ともあれ学部長会議や学内世論を尊重していく。

——改革準備委員会の答申はいつになるか、また改革委員会の発足は。

現在の大学改革準備委員会は、六月二十七日の運営協議会の決定を七月十六日に発足させたものである。構成員が年令的に若いから新しいものが盛り込めるだろう。これまで会議を二十数回も開いて討論を重ねていると聞く。中間答申はわたくしがたびたび催促しているので、今月末までには発表されると思う。その後、これをもとに作られる改革委員会には学生も参加させるが、発足の時期はまだわからない、できるだけ早く発足させたい。大学法に対する反対行動はもちろん今後も続けていくつもりだ。

——このロック・アウトに対して学生に強い反発があるが、学園回復に希望はあるか。

とにかくこんな状態に追い込まれたのは残念だ。まもなくすれば学生の方から正常化へのムードがでてくるのではないかと思う。徹底したクラス討論を期待したい。

（山口・平沼記者）